中村幸彦著述集

第九巻

©一九八二

中村幸彦著述集　第九巻
定価七〇〇〇円
昭和五十七年十二月一日印刷
昭和五十七年十二月十日発行
著者　中村幸彦
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
検印廃止

中村幸彦著述集　第九巻　俳諧瑣説

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

一　俳諧瑣論

1　不思議な文学（七）
2　季感の復活（九）
3　日常茶飯性と昇華（一一）
4　小説性過多（一三）
5　俳諧と漢詩（一七）
6　歳旦吟（二四）
7　談林調付句注釈の態度について（三〇）
8　にほんめでたき門の松（三六）
9　青と白―芭蕉と才麿（三九）
10　芭蕉と伊藤坦庵（四五）
11　七部集ところどころ（五一）
12　七部捜を読んで（六〇）
13　発句における和歌の利用（六四）
14　大和俳枕二題（六九）
15　伊勢の一句立（七四）
16　再び、伊勢の一句立について（八〇）
17　俳論研究の姿勢（八八）
18　俳人資料断片（九二）
19　芭蕉の人情（九六）

二　俳壇の構成　一〇一

三　初期名古屋俳壇の一資料　一二五

四　去来雑感　一三四

五　支考論　一四五

六　談林発句鑑賞　一六八
七　此ほとり一夜四歌仙評釈　二一九
後記　四五三
書誌　四五八

〈挿画〉
策伝和尚送答控　二七
歳旦吟元旦発句　二八
狗猧集　三七
坦庵詩集　四七
伊勢の一句立　八一
玉振集　九四
江崎清右衛門の蓮也宛
手紙　一二六
去来抄　一五〇
此ほとり一夜四歌仙　二三〇
太秦の牛祭図　三〇九
春日鹿曼荼羅　三六一

俳諧瑣説

一　俳諧瑣論

1　不思議な文学

考えて見れば不思議な文学もあるものだ。勿論俳句のことである。十七音の中に宇宙の大から、人情の微までを盛ろうというのである。丁度、葉末の露が森羅万象をやどすにもたとえられる。一句は常に全円的な、球的な充実を要求されている。芭蕉の門人への教えに、心の修練、日頃の工夫、席にのぞんでの気鋒など、真剣勝負に臨む武芸者へのそれのような言葉に接するのも、その充実を可能にする為である。一句を形成する一語一字の選択配置が、その死生を決定すること、この文学より甚しいものはない。又葉末の露が、風に吹かれて様々に変形し、しばしば散ってなくなり、残ったものは球にかえるに似ている。完全な美は、最もこわれやすいものだと評した人があるが、俳句の円相ほどこわれやすい、そのかわり完成した時には美しさを持つ文学は恐らくないのではあるまいか。

更に不思議なことは、それ程に微妙なものでありながら、俳句の創作に参加する人々は、どの文学よりも遥か

に多い。江戸時代の俳諧を、文学史家は、庶民的などと一口に称する。が、よく調査すれば、その参加の人々は社会的な身分でいえば、上は大名から下は乞食に及ぶ。教養の程度で見れば、儒人君子から田夫野人にいたる。身分知識の高下をとわぬ参加者のあったことは、江戸時代の俳諧にとって、幸いであったか不幸であったかは、評者の論のわかれる所であるが、事実に違いない。そして身分や教養層の構成のすっかり変わった現代においても、どの文学よりも参加人口の多いのが、俳句であることはいうまでもない。

更に不思議なことは、といえば、それは参加人口の多い点からも、当然だといえるかも知れないが、いわゆる俳趣味なるものが、日本人の生活に滲透していること、小説や演劇の比ではない。小説や演劇の生活への影響は、一時の流行としてはなやかであるけれども、変形し消滅してゆく。俳趣味と生活は、月を詠み一木一草を愛し、挨拶を交わし飲食をする、日々の具体的な面において一つになっている。生活が俳趣味で規定され、俳句も亦生活に規定される。よって芸術又は文学を常に生活の昇華したものと見る立場においては、俳句第二芸術論が生れてくるのも当然であろう。が、ここに俳句という生活に即した文学のあることをいかなる論も抹殺できない。江戸時代の俳諧に与える庶民的の語を、国民生活的という語に変えて、俳句の性格を定めてもよかろうか。

新しい思想では、大衆的であることが、その文学がより文学的であることだそうである。私はまだそこまでついてゆけないけれども、万人が文学を鑑賞し創作し、それによって文学と万人の生活が向上することが最ものぞましいと考える。とすれば、日本においては、結社の煩瑣と安易の中でのみ生息している現在のままでは不可能であろうけれども、上にいう如き真の意味の国民文学としての可能性を、この俳句という文学形式が内包しているのではなかろうか、と思ったりする時がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2　季感の復活

俳句についての季感の発言は、おびただしい。今更それをくりかえすつもりはない。が現代生活、殊に都会生活では、季感の喪失が甚しい。昼は暗く夜が明るいように、屋内は夏は涼しく、冬は暖い。花屋の店頭にすら時季はずれの花が何時もある。その時季はずれであることにさえ、気づくものが少くなった。四季の移りはカレンダー上の数字が物語るのみである。科学が自然を克服する面のみで発達した現代文化の下においては、しかたのない現象なのであろうか。

百年前までの我が国の生活では、そうではなかった。洒落本や人情本などいう人間臭い文学の端々にまで、四季の変化のきわめてあざやかな投影がある。それには、人々の生活環境に応じた年中行事なるものがあって、それに従って生活することが、風土と調和して、季感を豊かにしていたのである。その年中行事が既に、その基礎となっていた封建社会を崩壊せしめる努力によって、多くが過去のものとなりつつある。稀に残るものも、天の川の見えない梅雨空のもと、七夕セールの広告のみが空しい。しかし年中行事とは、封建社会のみが作ったものではない。日本人がこの土地に住みついた初めから、長年の生活の知恵の累積の結果であり、その中では日本における自然と時代時代の人生が調和して、美しい生活のリズムとなっている。季感を喪失したとともに、現代の都会生活には生活のリズムがなくなったように、私には見える。

何時、何処の生活にも、美しい生活にはリズムが必要である。現代でも、今の生活様式や思想に合わせてクリ

スマスなど西欧の生活の節を、個別的にとり入れて、リズムらしいものを与えようとする傾向はやはりある。がそれはおろかしいことでしかない。生活のリズムは、一貫した生活環境、その最大のものとして、日本の如く自然の変化の甚しい所では、土地や気候の風土に従うべきであることを、諸民族の歴史が教えてくれている。

私はここで、封建的な、でなくとも、今日と違った社会に設計された過去の年中行事を、そのまま個人単位になりつつある現代社会に復活せしめようと言おうとするのではない。現代は現代にふさわしい年中行事を持つべきである。といって悪ければ、現在においても、個人は、その人々の現代の年中行事的な生活のリズムを持ってほしいと考える。それには、克服の面のみでの自然に対する考えを、是正しなければなるまい。自然との調和の姿勢をとれば、そこに自ら季感が生まれてくるであろう。が、その季感も喪失された過去のままのものの復活である必要はない。現代人が、その感覚で新しいものをとらえ、その集合として、現代的季感が生れてくるのが、むしろ当然であろう。現代の日本には、生活に不可欠なもので、過去のものを捨てさって、新しいものを作り出していないものが、いくつもある。封建的道徳を捨てる方向に進んで既に久しいが、新しい道徳はまだ固っていない。季感や生活のリズムなどもその一つである。が、これらは一人の力で何ともならないと成行きにまかせてよいものではなかろう。やはり一人一人の努力が必要である。道徳の場合はしかし、そうした努力には、往々摩擦が起るかも知れない。季感の方にはその心配がない。芭蕉は「季節のひとつも探し出したらんは、後世によき賜」といったが、句を作らぬ場合でも、発見の楽しさがきっと伴うであろう。生活のリズムはさておいても、現代生活の豊かさと秩序の為に、季感の回復を願ってやまない。

調和という姿勢から生れる芸術作品は、情趣的なものとなるのが一般である。自然との調和に従った季感の文学は、一倍に情趣的であったこと勿論である。そして、文学史的に見て、その傾向の最後の文学様式であった幕

末の俳諧では、代々の残滓の如く陳腐な情趣的なものが充満していた。現代の文学態度は、情趣的なものを、理知的なものにかえた。調和より孤立反抗を尊ぶ。俳句の中における季感の表徴である季語に、陳腐と情趣性と、さまざまのあしきものの原因を見て、一部の熱心な俳人が季語の俳句からの追放をさけんだのが、有季無季論争のおこりであったろう。季感喪失の傾向にある現代では、おこり得べき論であったが、詩が情趣的であるのはあたり前であり、陳腐は理知の側にもある。問題は、私にいわせれば俳人のみならず現代人が努力してほしい、生活に直結した作者の季感の発見の有無にあるのではなかろうか。俳諧が不死鳥の文学である為には、季語はともかく日本人の生活に不可欠な季感とは、離れ得られないものであろう。

3　日常茶飯性と昇華

江戸時代の俳諧は、極く稀に見る、その故に文学史に残る僅かの俳人の作品においてのみ、今日の厳密な意味からは、許されるたぐいの文学であった。大部分の作品は、文学生活よりはもっと具体的な生活の所産であったと考える。今日では、芸術と認められる文学の創作は、少くともその精神面において、日常茶飯の生活とは一線を画する所においていとなまれ、その為に、より豊かな生活を作ることに寄与していることはいうまでもない。江戸時代の俳諧が具体的な生活の所産であったということを換言して、日常茶飯的要素が濃いとしてもよい。俳諧は挨拶であるとよく称されるが、そこでは社交の一手段だったのである。江戸座に属した大名や富人の趣味俳諧は、文学的である以上に娯楽的であったことは、その凝った俳意とつまらぬ句とを一見すればわかる。芭蕉の

発句ですら、しばしば通俗教訓的な誤解が与えられているのは、文学の中にも通俗教訓を見る、日常茶飯的に俳諧を理解する習慣があったことを証する。俳諧と相前後して、封建社会に発生し発達した茶道、花道などにも、限られた指導者を除けば、多くは日常茶飯性から脱出していないこと俳諧と甚だ相似る。元来、茶道、花道も俳諧も、具体的な生活に即して発生し発達したもので、それを完全に離れれば、そのものが存在し得ない風のものである。それでいて芸術の向上の為には、そこからの超脱を志向している。芭蕉はそのことを、この道は俗によって真趣をたのしむ事だと述べている。が、俗によって真趣をつかみ得ないことが多い。が、真趣を得た場合は、今日的な意味でも完全に文学と認め得る作品となるのである。そうした俳諧の向上を昇華という語であらわして見よう。

新しみは「俳諧の花」といった芭蕉は、俳諧文学の日常茶飯性と昇華の機構に十分気づいていたのである。日常茶飯的とは、また平凡の意で用いられる語でもある。近頃の如く、生活に新しい様式や新機具が次々にとり入れられても、次々とふるくなって行く。日常茶飯の場の俳諧でも、芸術的な驚きはやはり求めて、表現や対象を新しく変えて行っても、その限りではすぐにふるびて行く。時々の生活の変化も、おのずと俳諧の新しさを要求するであろう。が、俳諧はその意味の新しさを得ることだけでも、指導者の新案を必要とするのである。代々の撰集には何と平凡な句の多いことか。それも丁度、一つの家庭をとれば、どの家庭でも生活の基底は仲々動かないのが常である如くにである。すぐれた指導者としての芭蕉は、ふるび、粘着をおとして、常に新しみを求めることに励み且つ教えたが、芭蕉のその新しみの探求の努力は、彼の作品に常に新しみを失わない、換言すれば新古を超越した真実性を与える結果となった。日常茶飯的な生活も、生活であり、そこに生活の真実があるはずで、その発見に成功したのである。それを彼は「底のぬけたるは新古の差別なし」と称した。昇華という語であらわ

したのが、実はその底のぬけることに相当する。芭蕉以後の俳諧史を、かかる見方からながめると、一つの理解が出来るようである。談林運動から芭蕉と共に出発した人々で、新しみを追いながら、昇華し得なかったのが、言水などの人々であった。支考は蕉風俳諧の流布に努力して、俗をもとにして俳論を展開しているが、為に日常茶飯性の俳諧に堕することになった。蕪村の離俗論も、日常茶飯性を離れよとの論である。読書し古人を友として昇華の契機をつかめというのが彼のそこで説いた処である。子規が幕末の月並俳諧で嫌悪した小主観、生さとりとは、日常茶飯の生活面での意識（さとり）を、文学的なものと混同した所に生じたものである。子規は近代人らしく、それからの脱出、即ち昇華の方法を、物に即する客観写生においたことはいうまでもない。

筆者は今日の俳壇の動きに暗いので何ともいえないが、勿論江戸時代の俳諧とは面目一新して、近代文学の一翼となった俳句であるけれども、多くの作家の周囲には、俳趣味なるものの濃厚な日常生活がひろがっている。俳句には、なお俳諧以来本質的な日常茶飯性が全くはなくなっていないのでなかろうかと思われる点もある。とすれば、日常茶飯性に粘着する危険が、今日の作家に全くないとはいいきれない。芭蕉がその為に、初心には余念のない（芸術一筋の）俳諧を、巧者には、私意に走ることをいましめた教訓が、今もなお生きているように思われる。

4　小説性過多

先頃閑談の折、今年の大学受験者に文科志望が多かった話に及んだ。一友人は、今日のような、何が真実かわ

からなくなった世の中では、文学だけが常に真実を語っていることが、不知不識、青年達には魅力となるのであろうという意見を出した。別れてからふと私はこの言葉を反芻して見た。特に、「文学だけが」といったのか、或は「小説だけが」であったのか、ひどく気になった。一時の閑談の、どうだったとてかまわないことが気になった、私自身から問題ははじまる。

先日春団治がなくなって凋落の淵にのぞんでいる上方落語はしばらくおいて、東京では、ラジオの口演が、かえって広告ともなったとかで、寄席が大流行である。寄席に立寄ることを一つの楽しみにして、用事のある時折のみ上京する私にも、近頃の看客層の拡充がわかる程の大流行である。学生服で、若い身空で、そこへ足をはこんだことが、何かはずかしかった昔と違って、かつての私のような人々をもって、東京の寄席は充満している。東京の寄席演芸の中心は、関西の漫才に対して、勿論落語である。東京落語は、大学の文科と同じ様に、青年達の好みに合っていると考えてよい。

落語がジャーナリズムの対象となることも多くなった。落語の感想や評論が、既に数部の単行本をもふくめて、しばしば雑誌新聞の一隅にあらわれる。これらの論調はしかし昔とさして変らない。江戸以来の伝統を守り、明治を通じて芸にみがきをかけて来た純正な落語が尊重され、例えば柳家金語楼とその亜流の如き新傾向は、とかく邪道として軽視されている。この傾向は又、寄席の番組や看客の態度からしても、一般の好みを代表しているといえる。少くとも落語に於いては、現代の青年達が、古い伝統の芸に興味を持つ。この現象の原因は、一体どこにあるか。色々と考えられる。「大阪では芸はそだたない」という言葉は、既に諺化している。しかし大阪を一環として、上方には能、茶、花等、伝統諸芸で、尊重と保存を得ているものがないではない。大阪でそだたないのは、江戸時代に発生した演芸舞踊の類であり、それも東京との比較に於いていわれるこの言葉である。東京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com